

組織行動研究

No. 4

編集後記にかえて

●「男は堂々とあるべき。会社の生命は永遠です。その永遠のために私たちは奉仕すべきです。私たちの勤務はわずか二十年か三十年でも、会社の生命は永遠です。それを守るために男として堂々とあるべきです。今回の疑惑、会社のイメージダウン、本当に申し訳なく思います。責任とります。」と書き遺して、一人の人間が死んだ。そして、その死にざまがひとしきり取り沙汰された。死んだ人間の「愛人」なる女があらわれて「かれは殺されたのだ」と訴えた(某週刊誌の記事)というのも、そんな取り沙汰のうちのひとつであった。その女の言(正確には、週刊誌の記事というべきかもしれないが)によれば、「風呂に入ると

きでも着ているものをきちんと畳んで入るようなひとでした。それがいくら混乱状態にあったとはいえ、ズボン下姿のまま死ぬなんてとても考えられない……」というのである。

●その記事を読んで「たまらないな」とわたしは思った。「愛人」なる女も黙って線香でもあげていけばいいじゃないかと思った。週刊誌などに「二人のあいだのこもごも」まで喋る必要がどこにあるのかと腹立しい気持も覚えた。そんな気持を、ある日ある晩、繩のれんで居合せた佐野教授にもらした。杯の酒をぐびりと飲みながら五十男の佐野教授はおっしゃった。「女もいただけない、週刊誌もエゲツない、俺もそう思うよ、そりゃあ。しかしねえ、週刊誌買ってそういう記事を丹念に読んでそんなこと言ってるお前も少しオカシんじゃないかねえ。」つぎの日、「日本人のキャリア・デベロップメント」をテーマに勉強しているところの、わたしのセミナーの学生たちと議論した。二十代のかれらはのたまわった。「センセの気持もワかりますよ。でもアレじゃない、その「愛人」とかいう女、週刊誌にそんなことまで喋ベっちゃうほどフカーク愛し

てたってことじゃない、死んだ××さんをさあ。それに週刊誌だって記事にしますよ、そりゃあ、商売だもん。世の中ってそういうもんじゃないですか、センセ！」

●「男は堂々とあるべき」「会社は永遠」「男は責任をとるべき」——なんとも胸に重い文句ではあるまいか。「アナクロニズム」と切って捨てられるほどあなたは「近代人」か？ わたしたち日本人の「働く」ということには、そして働きながら自己の人生を「生きる」ということには、欧米流経営学や組織論や心理学の言葉では覆いつくせない重要なものが山ほどつまっているような気がして仕方がない。それは、わたしたちが、白らの「働くこと」や「働きつつ生きること」に絡ませている「美意識」とでも呼ぶようなモノだ。それを掬いあげて理論化していく「責任」がわたしたちにはあるだろう。本号には、そういう思いといらだちが若がきさせた、三十代男の手になる論文を二つ再録してある。「ひとつの覚えがき」と副題を添えたあたりに、三十男の純情(?)と居直り(?)とが気持悪く同居している——しばらくは読者のご寛大さに「甘え」させていただくことを決めよう。(南隆男)

慶應義塾大学産業研究所社会心理学研究班モノグラフ

組織行動研究(第4号)

編集 佐野勝男・南 隆男

KEIO STUDIES ON
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND
HUMAN PERFORMANCE No. 4
MARCH 1979

〒108 東京都港区三田2-15-45
発行 慶應義塾大学産業研究所
電話 (453) - 5640(直通)
<昭和54年3月31日>

〒104 東京都中央区八丁堀3-21-4
印刷 株式会社 国際印刷
電話 (551) - 3930(代表)
<昭和54年3月24日>